The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	経験をあらわず「シタコトガアル」について
Author(s)	池田, 英喜
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1996, 30, p. 11-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56452
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

経験をあらわす「シタコトガアル」について

池田英喜

0. はじめに

発話時以前（以下過去とする）に起こった出来事を経験としてあらわす時、私達は「ぼくは小説を書いたことがある」のように、「～シタコトガアル」という文末形式を用いるのが普通である。もちろん「ぼくは以前に小説を書いている」や「ぼくは十代で小説を書いた」のようにあらわすこともできるが、前者の場合は「小説を書いている」が動作の継続（動詞によって結果の持続）ではないこと、後者の場合はいわゆる完了ではないことを、「以前に・十代で」といった副詞的要素、あるいは文脈といったもので保障してやる必要がある。

本稿では「シタコトガアル」という形式が持つ特別な含意、機能を明らかにすることを目的とする。

1. 先行研究

「シタコトガアル」という形式自体に焦点を当てた研究はほとんど見当らない。仁田義雄（1981）は可能性を表す「スルコトガアル」と比較し「体験の有無」をあらわすとしているが、「シタコトガアル」についてはそれ以上の考察はない。他は工藤真由美（1989）が「シテイル」「シタ」との比較において「シタコトガアル」を考察し、いくつかの現象を指摘し

ているぐらいであるが、本稿ではこの工藤（1989）を先行研究として、批判を加えながら概観することにする。

工藤（1989）は、「シタコトガアル」は「ある時点までの期間に少なくとも一度、その出来事がおこっていること」をあらわすと断った上で、次の五つの特徴をあげている。なおそれぞれの例文は工藤からの抜粋であり、それぞれの項目には便宜上筆者が丸囲いの数字を付した。

① 基本的に、個別的＝具体的な出来事としてではなく一般的な出来事としてさしだす。

・「狩野さん、女と差向いで酒を飲んだことがある？」
「ありません」

まず何が個別的＝具体的であるか、何が一般的であるかがまったく説明されていない。たとえば「女と」が「伊達さん・杉山さんと」であれば個別的であるのかないのか、「酒を」が「日本酒を・バ　ボンを」であれば具体的であるのかないのかがわからない。もし今あげたように、たとえば「狩野さん、伊達さんと差向いで日本酒を飲んだことがある？」のように例文を変えても何ら問題のない文が得られるが、これは一般的な出来事として差し出しているからであろうか。個別的＝具体的な出来事、一般的な出来事が何であるかがわからない以上この主張は認められない。

② 発話時とかなり隔たった出来事しかあらわせない。この時間的隔たりは話し手の主観にまかされることも多い。

・きみはたしか｛ずっと前に／＊先週｝流感にかかったことがあるな

たしかに発話時とかなり隔たった出来事をあらわすように思われるが、上にも指摘があるようにこの隔たりは話し手の主観によるところが大きいので、説明としては不十分ではないだろうか。これは出来事時と発話時と

の時間差よりも、ひとつの出来事が完全に終結した、つまり発話時においてはその出来事はすでに過去のものとなっていると話し手が判断しているかどうかにその理由を求めるべきだと思われる。この点については2で詳しく述べる。

③　発話時において、直接的結果が現存している場合には使えない。ただ発話時までに出来事がおこったかどうかを問題とする。

・彼は既に2年前に日本に｛来ている／＊来たことがある｝。今京都にいるよ。

たとえば、「彼は2年前に胃潰瘍で胃を3分の2切ったことがある。今は残りの3分の1の胃ですっかり元気だ」というような場合、直接的結果が現存しているがまったく問題はない。ただ「既に」という副詞は用いることができないので、発話時と過去の出来事に何らかのつながりを話し手が認めるような文には向かないようである。理由は前出②と同じであると考えられるのでまとめて2で述べることにする。

④　主語が＜ハ＞の場合は、永続しないもとにもどりうる結果をとらえる動詞に制限される。

・川端康成は1979年に｛死んでいる／＊死んだことがある｝。

・ここで子どもが二人｛死んでいる／死んだことがある｝。

「Xは～シタコトガアル」では、あくまで「X」は経験主であるのに対して、「Xガ～シタコトガアル」では、「X」は出来事の主体であって、経験主ではない。よって、ハで示されるのが主語であるかどうかは別にして「Xハ～シタコトガアル」と「Xガ～シタコトガアル」は別のタイプの文として扱うほうが良いようである。この点については5で述べる。

⑤　運動動詞以外でも経験を表すことができる。

・おれは少年院にいたことがある。

動詞述語文に限らず、「彼はわけもなく嬉しかったことがある」「彼女は幼稚園の先生だったことがある」といった形容詞述語文、名詞述語文でも経験を表すことができる。またおそらく同じような理由から「ぼくは新聞配達をしていたことがある」と「シテイル（タ）」をその中に取り込んで述べることもできる。この点については3で述べる。

以上工藤（1989）の先行研究を批判しながら見てきたが、以下の節では今まで見落とされていた事実を指摘し、上のいくつかがこれによってひとつの理由で説明できることを示したいと思う。

2.　話し手の主観的認識による過去の出来事

②で話し手の頭の中では出来事が発話時において既に過去のものとなっていなければならないと述べたが、それは「ある出来事が、ひとつの過去の事実として、現在話し手の中に存在している」ことをこの「シタコトガアル」は述べているからであると言い換えられよう。この議論を認めるためには、出来事は話し手にとってはあくまで過去のことであって、発話時である現在とは切り離されたものであることを示す必要がある。このことは、話し手にとっての現在である発話時を含む副詞とともに「シタコトガアル」が使えるかどうかでテストすることができる。

（1）a　彼はフランス料理を｛食べた／食べたことがある｝。

　　b　彼は<u>今</u>フランス料理を｛食べた／＊食べたことがある｝。

（2）a　イチローはホームランを｛打った／打ったことがある｝。

　　b　イチローは<u>今週</u>ホームランを｛打った／？？打ったことがある｝。

（3）a　わたしはアメリカへ｛行った／行ったことがある｝。

b　わたしは今年アメリカへ｛行った／？？行ったことがある｝。

発話時を含む副詞をともなわない例、(1)a・(2)a・(3)aでは、「シタ」「シタコトガアル」がすべて許される。ところが、「今・今週・今年」といった発話時を含む副詞をともなった例、(1)b・(2)b・(3)bでは、これらの副詞は発話時における存在をあらわす「アル」とは共起できるはずであるにもかかわらず文法的でない文（以下非文とする）であるという判断が下される。これは、これらの副詞は「アル」ではなく「シタ」と結びついていることを示している。

さらに(1)b・(2)b・(3)bでは「シタ」であれば問題のない文であるのに対して、「シタコトガアル」であれば非文になる。いずれの場合にも「食べた・打った・行った」というのは発話時との時間の差こそあれ過去の出来事であることにかわりはないので、ただ単に出来事が過去に起こったかどうかが問題なのではないことがわかる。

以上の2点から出来事は客観的な過去の事実としてではなく、話し手の主観的な過去の事実としてあると認められた時に「シタコトガアル」ははじめて用いることができることを示した。

このことをふまえてもう一度例を見てみる。(2)bや(3)bでは「今週・今年」よりも「先週・去年」とするほうがより自然な文として受け入れられるが，これは前者は発話時を含んでも含まなくてもかまわないのに対して、後者は発話時を含むことが許されないからだと考えられる。前出の②に発話時とかなり隔たった出来事しかあらわせないというのがあり、かなり隔だったというのがどの程度のものなのかが明らかではないので説明として適当ではないと指摘したが、出来事が話し手にとっては過去の事実であるかどうかこそが問題であるので、発話時と出来事時の物理的時間的な隔たりが大きければ大きいほど文の許容度が高くなる、言いかえれば話

し手にとっては過去の事実でありやすくなるので、いわば当然の帰結と考えられるのである。

本節の議論が正しいことを示す良い例文があるので、まとめのかわりとして以下にあげておく。

(4)a　わたしは関東大震災にあったことがある。
　　b ?わたしは阪神大震災にあったことがある。

関東大震災は私達にとっては既に過去のものとなっているので「シタコトガアル」で経験として表現することに問題はないが、阪神大震災は過去のものといえる人とそうでない人がいるので必ずしも「シタコトガアル」で経験として表現することはできない。

3.　話し手にとっての特別な情報

前節で「シタコトガアル」であらわされるのは話し手の主観的な過去の事実であるというのを認めるべく議論を展開した。本節ではその過去の事実が話し手の主観的なものであることをさらに別の観点から示す。

(5)　彼はフランス料理を｛食べた／食べたことがある｝。
(6)　彼はフランス料理を｛食べ始めた／＊食べ始めたことがある｝。

まず、(5)と(6)を比較してみると、「食べ始めたことがある」の場合だけが非文になる。もちろんこれは、≪彼がフランス料理を食べる≫という出来事が話し手にとって過去の事実となっていないからであり、それは「食べ始める」が単に出来事の始まりの局面しかあらわさないことによる。つまり、話し手は出来事の始まりは過去のことであると認めてはいても、出来事全体（ここでは≪彼がフランス料理を食べる≫ということ）が過去の事実となっているという認識がなければ非文になるということである。

このことは次の(7)や(8)のような文の含意ともつながってくる。

(7)　わたしはアメリカへ｛行った／行ったことがある｝。
(8)　ダイアナは結婚したことがある。

(7)では、アメリカへ行っただけでは「シタコトガアル」は使えず、アメリカから帰ってきて初めて使えるし、また(8)では結婚しただけではなく、離婚あるいは死別など、なんらかの形でその結婚が一度は終わっていなければならない。これは話し手の認識の中でひとつの出来事として認められていることが何であるかと深くかかわっているといえよう。ちなみに話し手にとってのひとつのまとまった出来事は≪≫であらわすことにすると、(7)は≪渡米≫が、(8)は≪ダイアナの結婚生活≫がそれにあたるといえるだろう。

さきほど(5)の例文で「シタコトガアル」の場合には非文であったが、もし下の(9)のような文であったならば非文ではなくなるのがなぜなのかを次に考えてみる。なお、比較の便宜上、(5)の「シタコトガアル」の例もここでもう一度取りあげておくことにする。

(5)＊彼はフランス料理を食べ始めたことがある。
(9)　彼はぼくより早くフランス料理を食べ始めたことがある。

どちらも彼がフランス料理を食べ始めたことには違いないのだが、(5)は非文で(9)はそうではない。これは(5)の場合は、あくまで≪彼がフランス料理を食べる≫が話し手にとってのひとつの出来事であって、「食べ始める」というのはその出来事の一部にすぎないが、(9)の場合は≪彼が自分より早くフランス料理を食べ始める≫こと自体をひとつの出来事として認識しているからであると考えれば説明がつくであろう。(5)と(9)の違いは「ぼくより早く」という点だが、このようにある特別な情報が付加

された場合には話し手の出来事に対する認識が変化し、本来ならば出来事の一部しかあらわさないような表現であっても、それを単独でひとつの出来事として認識できるようになる。そこで問題になってくるのは何が話し手にとって特別な情報であるかということであるが、この点については次節で詳しく述べることにする。

話し手が何を過去の出来事として認識するかが、「シタコトガアル」成立の主たる要素であるという議論をここまですすめてきたが、これは工藤（1989）の先の⑤「運動動詞以外でも経験を表すことができる」こととも大きくかかわっている。出来事をあらわすには動詞述語文が用いられ、形容詞述語文や名詞述語文といったものは出来事を表すとはみなされないのが普通だが、「シタコトガアル」を考慮に入れた場合には、形容詞述語文や名詞述語文であっても話し手はひとつの出来事として認識していると考えられるからである。具体例は次のとおりである。

(10)	わたしはあの町にいたことがある。	状態動詞述語文
(11)	わたしはテニスをしていたことがある。	テイル動詞述語文
(12)	彼は女性に厳しかったことがある。	形容詞述語文
(13)	彼女は英語の教師だったことがある。	名詞述語文

それぞれの文で話し手がひとつの出来事として認識しているのは、≪自分があの町にいた≫・≪自分がテニスをしていた≫・≪彼が女性に厳しかった≫・≪彼女が英語の教師だった≫であろう。これらに共通しているのは、ある限られた時間の範囲内に存在した事実ということである。「シタコトガアル」によってあらわされる事実には、それが運動であるか状態であるかといったような区別はまったく無意味であり、過去のある限られた時間の中での事実はどんなことであっても話し手に出来事として認識される資格があるといえよう。

4. 非日常的出来事

≪彼がフランス料理を食べ始めた≫はひとつの出来事として話し手に認識されるには不十分であるのに、≪彼が自分より早くフランス料理を食べ始めた≫は十分であるのは、後者が話し手にとって「自分より早く」という特別な情報をもっているからであると述べた。そこで本節では話し手にとっての特別な情報とはどのようなものかを考える。

(14)？ぼくは朝食を食べたことがある。
(15)　ぼくは朝食を食べなかったことがある。
(16)　彼は風邪をひいたことがある。
(17)？彼は風邪が治ったことがある。
(18)　安部は服役したことがある。
(19)　安部は出所したことがある。

(14)≪朝食を食べた≫と(15)≪朝食を食べなかった≫では、前者がごく日常的なことを後者が非日常的なことを、(16)≪彼が風邪をひいた≫と(17)≪彼の風邪が治った≫では逆に前者が非日常的なことを後者が日常的なことを過去の事実として述べている。朝食を食べるのは誰もが行なう日常的な食生活であるし、風邪をひいても時間的に多少の個人差はあれ、誰でも治るものだと私達はいわば常識として知っている。それに対して、朝食を食べないというのは誰もが行なう日常的な食生活ではないし、風邪をひくというのは通常の健康である状態ではなくなることだと私達は思っている。つまり「シタコトガアル」によって示される過去の出来事は、話し手にとって常識的に考えて通常ではないことといえる。これをここでは非日常的出来事と呼ぶことにするが、非日常的出来事が話し手にとって特別な情報をもっていると考えるのはごく自然なことである。

例に戻ると、(18)では、安部は非受刑者としての生活が普通であり、なにかの犯罪を犯したために刑務所で暮らすことになったと解釈されるが、(19)ではむしろ、受刑者としての生活のほうが安部にとっては普通であると解釈されるだろう。これも「シタコトガアル」によって示される過去の出来事は、話し手が非日常的出来事とみなすものであると考えれば無理なく説明できる。

5. 「Xハ～シタコトガアル」と「Xガ～シタコトガアル」

工藤（1989）の④に対して述べたように「Xハ」と「Xガ」では経験主と出来事の主体の違いがある。このことは「シタコトガアル」と同じく「アル」を述語にもつ「YニハZガアル」という、いわゆる存在文とも無関係ではない。たとえば「Xハ～シタコトガアル」は「象には長い鼻がある」や「広島にはうまい牡蠣がある」といった文と同様に、「Xニハ～シタ経験ガアル」と読み替えても問題は生じない（(20)b、(21)b）。つまり「Xハ～シタコトガアル」の「Xハ」は、同じ存在文であっても具体的なものが存在する場ではなく、過去の出来事が経験として存在する場としての経験主をあらわしているといえる。ところが、(22)や(23)の「Xガ」は(20)b、(21)bのように「Xニハ～シタ経験ガアル」に変えることはできない。

「Xガ」はあくまで「～シタ」であらわされる過去の出来事の主体にすぎないからである。経験主がいない以上、経験をあらわす形式とすることには問題があるので、「Xガ～シタコトガアル」は過去の出来事の存在をあらわす形式と呼んでおく。(20)～(23)の例文中の下線部は筆者による。

(20) a　故大平首相は、…中略…政治資金の透明度を増す改革に熱意を示したことがある。　朝日新聞天声人語1986. 4. 6

b　故大平首相には、改革に熱意を示した経験がある。

(21) a　たしか同じ言葉で彼は杏子の病気を紛らわすのを手伝ったことがある。　『杏子』古井由吉

b　彼には杏子の病気を紛らわすのを手伝った経験がある。

(22) a　…複数の保守新党の誕生により、自民党による「一党支配」が崩れる可能性が出てきたことがある。朝日新聞天声人語1993. 7. 1

b ＊自民党による「一党支配」が崩れる可能性には出てきた経験がある。

(23) a　…戦時中、青函連絡船の12隻が全滅したことがある。

朝日新聞天声人語1988. 3. 8

b ＊戦時中、青函連絡船の12隻には全滅した経験がある。

「Xハ～シタコトガアル」は「Xニハ～シタ経験がアル」と読み替えが可能で、「X」は経験主であるという以上、④の「川端康成は1979年に死んだことがある」という例文が非文となる理由は明らかである。「川端康成には1979年に死んだ経験がある」と読み替えてみるとさらによくわかるが、経験とは過去の限られた時間内に起こった出来事の存在が経験主にあるということを述べるのであるから、一度起こるとそれが永続するような「死ぬ」というタイプの動詞は使えないのである。

6. 否　　定

前節では同じ「シタコトガアル」にも経験主の有無によって、経験をあらわす文と、単に過去の出来事の存在をあらわす文の2種類を認めるべきであることを述べたが、否定文を考えたときにもこの2種類を分けて考えることは有効である。

(24) a　29歳の山井さんは英、米、スウェーデン、デンマーク、シンガポ

ールなどの老人ホームを実習しながら回ったことがある。

朝日新聞天声人語1991. 10. 1

b　山井さんは老人ホームを回ったことがない

(25) a　連合の山岸章会長は「改革ならヒトラーだって唱えた」と言い放ったことがある。　朝日新聞天声人語1993. 6. 23

b　山岸章会長は「改革ならヒトラーだって唱えた」と言い放ったことがない。

(26) a　今度来日した中国残留孤児の一行が銀座を歩いたことがある。

朝日新聞天声人語1985. 2. 28

b ＊中国残留孤児の一行が銀座を歩いたことがない。

c　中国残留孤児の一行が銀座を歩いたことはない。

(27) a　天気図1枚に5つもの台風が記録されたことがある。

朝日新聞天声人語1991. 10. 8

b ＊天気図一枚に5つもの台風が記録されたことがない。

c　天気図一枚に5つもの台風が記録されたことはない。

上の例文にあるとおり、「Xハ～シタコトガアル」という経験をあらわす文は、「Xハ～シタコトガナイ」という経験の否定をあらわす文にすることができる（(24) b、(25) b）。過去の非日常的出来事の存在を経験主の中に話し手が認めなければ否定文になるわけである。ところが、「Xガ～シタコトガアル」という過去の出来事の存在をあらわす文は、「Xガ～シタコトガナイ」という過去の出来事の存在の否定をあらわす文にはできない（(26) b、(27) b）。なぜなら、単に過去の非日常的な出来事の有無をあらわす場合、「Xニハ」という存在の場をもたないので、必ずしも存在文と同じ振る舞いをしないからである。それに加えて「シタコトガナイ」と否定にすると非日常的な出来事はそもそも存在しない、出来事は日常的

なものでしかないということになり、「シタコトガアル」を使う理由がなくなってしまう。(26)c、(27)cのように「シタコトハナイ」にすると否定文も許されるが、これは「渋谷を歩いたことはあるが．銀座を歩いたことはない」「低気圧が記録されたことはあるが、台風が記録されたことはない」といった対比の含意が生まれるためであり、単純にひとつの出来事の存在を否定する文ではなくなってしまっている。

7. 「シタコトガアル」と「スルコトガアッタ」

仁田（1981）は、「スルコトガアッタ」は過去における事象成立の可能性の有無をあらわすと述べているが、「シタコトガアル」と「スルコトガアッタ」は、ともに話し手が過去の出来事の存在を認識していることにはかわりない。

(28) 無人のはずの隣の家が｛？一度／時々｝騒がしいことがあった。
(29) 無人のはずの隣の家が｛一度／？時々｝騒がしかったことがある。
(30) うちの父は、｛？？一度／時々｝失業中であることがあった。
(31) うちの父は、｛一度／？？時々｝失業中であったことがある。
(32) 同じクラスの者同士が｛＊一度／時々｝結婚することがあった。
(33) 同じクラスの者同士が｛一度／＊時々｝結婚したことがある。

(28)(29)をみる限り、両者に違いはないようだが、(30)～(33)をみると「スルコトガアッタ」は出来事（仁田の言葉では事象）が繰り返し起こることを含意しているように思える。たとえば(30)と(32)では「一度」と出来事の起こる頻度を限定すると違和感のある文ができるが、繰り返し出来事が起こることを示す「時々」ならばそうはならない。特に(32)では、同じクラスの者同士のカップルが何組かあって、その中の何組かが結婚したという状況が考えられるだろう。それゆえに、「一度」は不可で「時々」

だけが許されると考えられる。逆に(33)では、対象となるカップルは一組しか考えられず、その一組の結婚が時々起こるということは普通ありえないので「一度」が選ばれるのである。

出来事が繰り返し起こる可能性という観点から見た場合、「シタコトガアル」はその可能性が低く「スルコトガアッタ」はその可能性が高いということになったが、例えば「何度か」という副詞との共起をここでは考えてみる。

(34) うちの父は、何度か失業中で｛あることがあった／あったことがある｝。

(35) 同じクラスの者同士が、何度か｛結婚することがあった／結婚したことがある｝。

「時々」では非文、あるいは違和感を覚えた「シタコトガアル」も同じように出来事の繰り返しをあらわす「何度か」であればまったく問題がない。このことは両者の違いが出来事の繰り返しの可能性の有無にあるのではないことを示している。「時々」と「何度か」は次のような文に用いるとその差がはっきりする。

(36) 彼は｛時々／＊何度か｝寝坊する。

(37) 彼は｛時々／何度か｝寝坊した。

「時々」は出来事を過去に限定しないのに対し、「何度か」は出来事を過去に限定するのである。結局「スルコトガアッタ」では話し手は過去の出来事の存在を認識していながら、さらに将来にもその出来事が起こる可能性を否定してはいないが、「シタコトガアル」ではあくまでも話し手は過去における出来事の存在を認識するにとどまるということである。

8. おわりに

通常、単に経験をあらわすとされる「シタコトガアル」という形式について工藤（1989）の記述を検証していく形で考察し、議論してきたが、その中でいくつか明らかになった点をここにまとめておく。

・「シタコトガアル」は客観的事実としてではなく、話し手の主観として過去の事実の存在を述べるものである。

・「シタコトガアル」は話し手にとって特別な情報＝非日常的出来事の存在を述べるものである。

・「Xガ～シタコトガアル」と「Xハ～シタコトガアル」は、前者を過去の非日常的出来事の存在を表す形式、後者を「Xハ」という経験者のもつ経験を表す形式として区別するべきである。前者は否定文にはできないが、後者は未経験であることをあらわす文として否定文にできる。

参考文献

池田英喜（1995）「シタコトガアルとシテイル――経験を表す2つの形式――」『日本語類義表現の文法（上）単文編』宮島達夫・仁田義雄編くろしお出版

工藤真由美（1989）「現代日本語のパーフェクトをめぐって」『ことばの科学3』むぎ書房

高橋太郎（1985）『現代日本語のアスペクトとテンス』秀英出版

――――（1986）「形容詞のテンスについて」『論集日本語研究(一)現代編』宮地裕編　明治書院

寺村秀雄（1976）「'タ'の意味と機能――アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ――」『岩倉具実教授退職記念論文集　言語学と日本語問題』くろしお出版（1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ」くろしお出版所収）

――――（1986）「「前提」「含意」と「影」」『論集日本語研究(一)現代編』宮地裕編　明治書院

仁田義雄（1981）「可能性・蓋然性を表す疑似ムード」『國語と國文学』第六百八十七号　東京大学国語国文学会

森山卓郎（1984）「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』 vol. 3–12

（大学院後期課程学生）